



大阪の選択 なぜ都構想は再び否決されたのか 善教将大 著

有斐閣 (2021年11月) 本体1,900円+税/224ページ



評者



津田塾大学
学芸学部 教授
西川 賢

政治学の魅力を体験せよ

本書は、サントリー学芸賞受賞作である『維新支持の分析』に続く、善教将大氏の大阪維新の会に関する実証研究の第2弾である。

前著に引き続き、著者は維新を巡る大阪の有権者の政治的選択について、データを地道かつ継続的に収集している。それをしつかりと分析した上で、一般読者に分かりやすい言葉で、得られた知見を伝えるスタイルを貫いている。印象論的・表面的な議論を排し、エビデンスに基づく堅実な議論を提供することで、日本政治に関する正確な知識を培っていくとする著者の姿勢は、「データ分析時代の政治評論」の見本を成しているともいえるだろう。

本書のもう一つの特徴は、通俗的な見解を排し、より確実性の高い知見を示していく姿勢である。例えば、橋下徹氏が人気を牽引したから大阪で維新が支持されてきたという見方は正しいのだろうか。本書によれば、答えは否である。維新が支持されているのは、他の政党に比べて、維新が府市間の利益を調整し、大阪の利益を代表する政党として機能しているためである。また、大阪都構想は、最初は賛成多数であったのに、

に、なぜ徐々に賛否拮抗となり、最終的に再び否決されてしまったのか。この点についても、著者はデータを緻密に分析した上で、吉村洋文知事の人気や毎日新聞の報道の影響といった「俗説」を排しつつ、独自の解答を提示している。

さらに、著者はいくつかの現実的な課題を提起している。第一に、2度にわたる都構想を巡る住民投票後、大阪では市民間で意見の極端化（分極化）が進んだことが示されている。都構想を巡る騒動を経て、大阪における政治対立がより深刻化の度合いを増したものと解せば、これは望ましい状況とはいえない。次に、大阪における自民党は維新に代わる選択肢として機能していない。著者によれば、これは中選挙区制度がもたらす制度的・構造的要因に起因するものであるという。

章末のコラムも充実しており、いずれも政治学の面白さを伝えるものとなっている。加えて、本書のオンライン付録（有斐閣ウェブサイトの本書の特設ページからアクセスできる）には、本書の分析に用いられたデータの概略や分析手法の詳細が補足されており、研究の透明性を高めるとともに、読者を本格的な政治学へと誘う圧巻の内容となっている。本書を足掛かりとして本格的な政治学の世界をのぞきたい方々は、コラムや付録もぜひ一読されたい。